南康生空襲体験記

出典『岡崎空襲体験記　第四集　総集編』

南康生の諸先輩が体験した貴重なお話しです。

編集　中村　正

県立岡崎病院（岡崎公園内）中嶋　清　2005 年

菅生川堤防で燃える松の木　前田はな子　2010 年

岡崎公園グランドと南康生町での空襲体験

矢作町　神谷　花子（七九）

私は、当時、連尺国民学校の五年生十一歳でした。この時の空襲体験を語らせていただきます。それでは三本立に区切って、語ります。

一、昭和二十年七月十九日、菅生神社祭礼日

岡崎公園グランドへ父の運転する、オート三輪で避難する。

県立岡崎病院へ、Ｂ29 数十機来て、焼夷弾をおとす。連尺、東康生、中町方面の上空、竜巻のごとく火の海

二、防空ごうへ、非常時の食糧保管

白米の、おにぎりの炊き出し

三、連尺国民学校が焼失した

夏休みが終わってからの学校生活

この三本立にして、その順序で語ります。

私は、西尾市米津町の、母の姉の家へ、私と弟二人と、疎開をしておりました。

疎開先が私達を含めて、十名でした。大家族です。

おば様と私と、女は二人でした。朝四時頃おきて、タライで洗濯をします。手の皮がむけてしまい、痛かった。でも井戸水が、大変つめたく気持ちよかった。

次に、働きにいく人の弁当を作りました。家の掃除で、くたくたになりました。

弟二人は、昼間は、梅の木の下や、防空壕に入って遊んでいましたが、夕方になると岡崎の方向を見て、「母ちゃん！母ちゃん」と泣くんですよ。淋しくて、岡崎へ帰りたいといっては、泣いておりました。それでも、仕事から帰って来たおじ様が、ねる迄、本をよんでくれました。ある時、弟と兄とケンカをしました。「どうしても岡崎へ帰る」といい出したので、岡崎から食糧を一杯つんで、オート三輪で、父が来てくれました。

弟達はうれしくて、荷台にのっていました。その時、父が「花子はこのまま世話になるか」といった時、「水のんで何にもなくても、母ちゃんとこへ帰りたい」と泣きました。

岡崎へ帰ると、母と姉が待っていてくれて三人をだきしめてくれました。

母が「もうどんなことがあっても、家族一緒だよ」といってくれました。

この写真のように、母も一〇二歳で高齢者施設へ入所しています。元気でしたら、母が語りべになっていたかも知れません。

一番の説明をします。七月十九日は、菅生神社の祭礼の日でした。母が、防空壕から非常時の米で、ちらし寿司を作ってくれました。おいしかったです。

神社は、花火もなく、店屋もなく、しずかでした。

いつものように、かやをつり、二階で寝ていると、空襲警報のサイレンがありました。階下から、父の声で、どなるように大声で、「早く、オート三輪にのれ！」といわれました。荷台に家族全員がのり、その上からフトンが三枚位掛けられ、防火用水の水をバケツに三杯位、ザーザーとかけました。

岡崎公園のグランドへいきました。フトンをかぶり、道を歩いて、逃げる人達でグランドへは、車がたどり着くまで時間がかかりました。公園グランドの真中にいました。父達は、南康生十一組を守る為に、組長さんの指示のもとに、手押しポンプ、バケツリレーで建物を守りました。

南康生十一組は、一軒も焼けませんでした。グランドの北側の県立岡崎病院へ、B29がキーン、キーンと音をたて焼夷弾を、落としました。花火のごとく、病院は火の海でした。

オート三輪の荷台に乗っている近く迄、火の粉がとんで来ました。私は左目の上を、やけどしました。フトンの端がぬれていたので、母がおさえていてくれていました。

病院の窓から人・・・人と、とび落ちたり、大きな悲鳴が聞こえ、まるで地獄絵のように病院は全焼しました。

第三集の表紙絵の、高瀬忠三先生は、私の音楽の恩師です。亡くなられたですが、岡崎刑務所の塀の上を竜巻が上空へ、舞い上がっている絵でした。真赤にもえた空は、絵の具でかいたようでした。

二番目にうつります。

空襲警報が解除され、私の家は南康生町で乾物屋でしたので、近所の人達が集まって来て、お互いに無事を喜びあい、戦争の恐ろしさを、涙しました。母の提案で、防空壕にある米を、かまどで五升たきました。

近所の人達も手伝い、おにぎりを作りました。道ゆく人々に、「おにぎり、たべませんか。」と声をかけました。私の手もあつくて、真赤になっていました。みるみる長い列が出来、口々に「ありがとう！」と感謝のことばを聞きました。又五升たきました。

その時、私の父母はえらい人だなあと思いました。当時は、米、たまり、

油は配給でした。私の家には食物が色々あったのは、父が家々の人から着物、宝石、古文書等と農家の人達と物々交換の仕事を、オート三輪で回ってしていました。大きな声ではいえないけど、ヤミ屋でした。でも、助かった人々が多くあったと思います。

三、連尺国民学校が焼失してしまい、夏休みが終わり、広幡学校へ二部制で、お世話になりました。まだまだ戦時中ですので、疎開先から帰ってこない生徒が多くいました。

授業も、短時間で、乙川の河川敷でさつまいも、かぼちゃを作り、いなごを取り、学校で煮てたべました。私はイナゴは大きらいでした。桑の葉もつみ、おかいこさんのエサにしていました。

連尺国民学校は給食室の一部が残っただけで全部焼けてしまいました。母や父が、「焼けあとへは絶対に、見にいってはいけない。」と注意されました。まだまだ、空襲警報は解除されても東康生の周囲は、家の残がいがもえていて、町中が熱くて、時に、艦載機も来ました。「学校が、もえてしまった！」「いっては、駄目」といわれたが、六年生の近所の男の生徒と見にいきました。ここからは、ほんとうに語りたくなかったことです。

黒こげの人々、消防の人達が足をひきずり遺体を並べていた。手のちぎれた人、「痛いよ、痛いよ。」となきさけぶ声。私は五年生ですので恐怖心と、助けてあげれない辛さで逃げ帰って来ました。当分のあいだ無口になりました。食事も食べれませんでした。戦争は絶対に反対です。今の平和の世の中を願っています。戦争を知らない人々に語りつづけることは必要です。

岡崎空襲で、多くの方々が亡くなられ、ご冥福をお祈り申し上げます。

第23回戦争体験を語る会　二〇一二・八・五

菅生神社での空襲体験

朝日町　倉地　和子（八三）

「昭和二十年七月十九日、二十日の出来事。」

十九日は菅生神社祭典の日。いつもなら提灯で飾った船がでて賑ったが、戦争で花火もなかった。

空襲警報で、北の鳥居をくぐり、大人や子供達男女が、境内の庭を通り逃げて行った。南の殿橋の下は避難した人でいっぱいでした。菅生川には、葦がいっぱい生えて、川の中に島が出来ていた。

私の家は、菅生神社の神主を父がしていて社務所の南に住んでいました。

空襲のサイレンが鳴り、敵機が来て、焼夷弾が川の中に落ち、金魚花火のようだった。

家から出て様子を見ていたが、危なくなって、家に入り、疲れたのか、家の中で横になっていた。

明け方になって菅生川の方へ行くと、土手や河原に皆んなのウメキ声が聞こえ、十人以上の人が黒こげになっていた。うつむいている人や、あおむけになっている人が見えた。

うめいている人は、担架に乗せて、菅生神社の社務所へと運ばれて、手当を受けた。姉と私と母も手伝い、とてもとても大変でした。

菅生神社の社務所、座敷へ

大勢の「ケガ」人

七月二十日、二十一日の出来事。

夜明けから「ケガ」人が多く担架に乗せられ、ウメキ声の人が送られて来ました。社務所の座敷は五十人位で満席となりました。ホータイとくすりで、係の人がお手伝いをしていました。衛生兵のような人もきました。姉と私も手伝いました。あちこちからウメキ声がして、

「水、水」

と言われ、私はヤカンに水をいれ、ガーゼと綿花を割箸に巻きつけ、口許へ水を多くふくませる。口に水をしたためホッとする。一人一人、よごれるので割箸を代えた。大勢なので大変でした。

その時は、私は十五歳位でした。私の友達のメガ洋品店の高木いつさんのお姉さんもみえました。

ケガをしている人の家族の人も来てくれましたが、来ない人の方が多く大変でした。

夏の暑い時でしたので「痛い、痛い」「水、水」の声。キズからウジが湧いている人、皆さんが、とてもお気の毒でした。畳一畳に一人で、タンカのまま置かれ、人間の油や、おシッコで畳はダメになりました。

二度と戦争のない様に祈る。

平和な世界でいたいです。

堤防の松の生木が燃えた

康生通南　前田　はな子（八六）

私は昭和二年、一九二七生まれの八三歳でございます。六十五年前の七月十九日岡崎空襲体験の話をさせていただきます。あの日、七月十九日は、菅生神社の祭礼の日でして、戦争中でなければ神社前の菅生川に提灯で飾られた鉾船が、各町内から人が出て、川面に美しい火がともり、町内の若者が、ワッショ、ワッショと揃いの法被姿で花火を打ち上げる年に一度の楽しい夜でした。

私の家は、神社と直線距離で五百メートルくらいの所です。その夜は母親が大切にしていた白米を出し、すし飯を炊いて、ありあわせの人参、ナス等と、どこで手に入れたのか貴重な卵の蒸し焼きなどで、ちらしずしを作ってくれました。電灯に黒い布を被せた、燈火管制の室で家族四人で頂き、「おいしい。おいしい。こんなにおいしいすしは何年ぶりかね。」と頂いていました。

その頃、兄は中支、今の中国に兵隊で行っていました。弟は八歳と十歳で、稲熊の知り合いの家に夜だけ疎開避難していました。あの日は桝塚の航空隊の下士官二名と、予科練の方三名は泊まってみえたので、おすしもお分けしていました。

空襲警報・甲山のサイレン

夜の九時頃でしたでしょうか？ラジオから警戒警報発令。甲山のサイレンが鳴り出しました。Ｂ29編隊が紀伊半島より上陸、東海地方に向かって北上中といつものニュースの事です。その頃はＢ29の爆撃で日本全

国各地で爆弾、焼夷弾の被害を受けていました。「今度は岡崎」と思っていましたが、「福井方面に向かった」とのニュースで、「やれ、やれ良かった。今夜は空襲はないから早く寝るように」との父の声に、防空頭巾をかぶり、肩掛けの袋をぶら下げ、運動靴を傍に置き布団に入りましたが、蒸し暑くて何か予感がしたのか、なかなか眠れなかった。うとうとした深夜と思いますが、空襲警報の甲山のサイレンが鳴りました。「空襲警報発令。敵機は岡崎方面に引き返すもよう」のラジオの声。

B29の編隊の爆音が聞こえてきました。

「早く起きろ！」

父の叫び声で、防空頭巾をかぶり靴を履いて袋をかけました。ドカン・パチパチ・バラバラと焼夷弾・真赤な火柱が見えます。

「殿橋の下流に逃げろ」

航空隊の兵隊さんは、「自転車を貸してくれ」といって隊に帰る。「気を付けて、気を付けて下さい。」と大声を残して、岡崎公園方面に国道を走って行かれました。

ドカン・パチパチ・パチパチ・パラパラ。焼夷弾は飛び散って落ちる。

「殿橋の下流に逃げろ。防空壕は危ない。」

との父の声。母と妹と私は夢中で走った。パーンと火柱が上がる。どうして火の中を抜け逃げたか良くわかりませんが、夢中で走りました。父は仏壇の中の位牌と仏様を取りに戻る。

「大丈夫かな、助けて下さい。」と私は仏様に祈った。周りには、あちらこちらに大勢の人が走って逃げていた。

草ぼうぼうの土手で一晩

川の土手までどうして逃げたか憶えていない。川の土手は草ぼうぼうで痒い虫も沢山いたが、痒みは感じない。水のたまった沼に入った。

ドカーン。シュー。大きな音、焦げ臭い油の臭い。向こう側の堤防の松の大木に焼夷弾が当り、木が割れて生木が燃える。

ドーン。パチパチ。ドーン、パチパチ。

何本も焼けながら燃えている。焼けながら並んでいる。見たことのない恐ろしい風景でした。

やがて夜が明けてB29の爆音は静まり、所々に蔵の白い建物だけが残っていた。沼から出た時、足に血を吸うヒルがいっぱいついていた。

弟二人を送ってきてくれた稲熊の叔父さんの話によると、伝馬通り、籠田、康生通りは丸焼け野原、道は熱かった。背中に焼夷弾を受けて「熱いよ。熱いよ。」と唸っていた少年。腕が焼けて真っ黒になっている人がいたことを聞いて、胸が痛みました。足がすくみました。

空襲は恐ろしい。戦争は恐ろしい。お陰様で私の家族一同、皆命は助かりました。後で同級生、近所の叔母さんも亡くなられたと聞きました。

私達は焼け残った近所の家の方よりご飯をいただいたりしました。その後は美合の山の方、やなので八月十五日の終戦を迎えました。

今日は長崎の原爆の落ちた悲しい日ですよね。戦争のない平和な世の中は本当に幸せです。

戦争のない平和が続くことを祈ります。

第21回戦争体験を語る会　二〇一〇、八、九